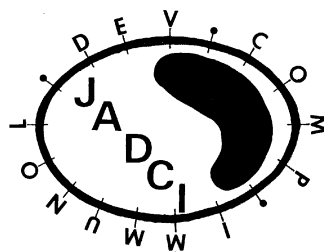


JADCI News

No. 30

2006. 12. 2

First call: 第19回学術集会
平成18年度古田賞受賞者
JADCI News 電子版への道



日本比較免疫学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadci/index.html>

目 次：

貪食細胞学のすすめ	吉田 彪 -----	1
パッション記念日	古田恵美子 -----	3
第1回古田賞を受賞された方々より		
ギンブナは魚類におけるマウス一受賞のご挨拶にかえて		
古田賞	中西照幸 -----	6
肝臓EST解析による円口類ヤツメウナギ補体系遺伝子の網羅的単離		
古田賞奨励賞	木村鮎子 -----	9
第18回学術集会を終えて	藤井 保 -----	10
浜名湖へのご招待	(第19回学術集会会長) 鈴木 讓 -----	12
第19回学術集会のご案内 (First Call)	鈴木 讓 -----	14
第10回国際比較免疫学会に参加して	中尾実樹 -----	15
事務局より	-----	16
日本比較免疫学会会則 (平成18年8月24日改訂)	-----	18

日本比較免疫学会 役員

会長：吉田 彪 (ライフケア互酬会)

副会長：川畑俊一郎 (九州大学)

庶務・会計：中尾実樹 (九州大学)、補助役員 柚本智軌 (九州大学)

学術集会担当：中村弘明 (東京歯科大学)、山口恵一郎 (独協医科大学)

英文抄録担当：飯島亮介 (帝京大学)

ホームページ担当：広瀬裕一

監査：友永 進 (昇陽学園)、和合治久 (埼玉医科大学)

*活性化委員会：中尾実樹 (九州大学)、飯島亮介 (帝京大学)、安住 薫 (北海道大学)、阿部健之 (日本大学)、谷合幹代子 (農業生物資源研究所) 木村美智代 (埼玉医科大学)

発行者：日本比較免疫学会長 吉田 彪

事務局：庶務担当 中尾実樹

住所 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

九州大学大学院農学研究院 水族生化学研究室

事務局 e-mail: jadci2@agr.kyushu-u.ac.jp

電話 092-642-2894 (ダイヤルイン) FAX 092-542-2897

郵便振替 口座番号 01730-9-80586

加入者名 日本比較免疫学会

パッション記念日

比較免疫学研究所
古田恵美子

「日付け」と言うものは、特定の個人或いは集団にとって、特別な意味を持っていることがあります。例えば、8・15はあの忌まわしい戦争に負けた日であり、9・11は、テロによる暴虐の日でありました。日本人にかぎって言えば、8・6は広島に、8・9は長崎に原爆投下され、凄まじい地獄を見た日でもあります。決して忘れる事はできません。そして、最近の私にとって平成17年4月1日は、愛犬茶々が死んだ日でありました。

このように書き記してきて、記念すべき日には、悲しみの日が多い事に気づきました。しかし、幾つかある喜ばしい日の中に「平成元年11月28日」が私の脳細胞に鮮やかに刻み付けられているのです。我が「日本比較免疫学会」発足の年であります。

第1回学術集会のあの若やいだ情熱的な講演、質疑応答。懐かしく思い出されます。

そして、平成18年8月24日、「平成」と共に歩んできました当学会は、第18回目を迎えました。広島県立大学は、それは美しい（掃除の行き届いた）ものでした。学術集会長藤井保先生の大学での人気を示すが如く、大勢の可愛い女子学生達が、心のこもったお手伝いをしてくれていました。8月24日夕方から始まった懇親会も学長先生はじめ副学長、同窓会長の先生方にご出席頂きましたこと、また女子学生達のマンドリン演奏も嬉しく心に残りました。

しかし、なによりも喜ばしいことは、学会総会での吉田会長（役員会決議）による“古田賞を「日本比較免疫学会古田賞」にしたい”旨の発議があり、全会一致で認められ、受賞者の発表、表彰そして受賞講演が行われたことであります。

第一回の受賞者は、日本大学の中西照幸先生、奨励賞は東京大学の木村鮎子先生でした。中西先生の受賞講演は、まさに「比較免疫学」の発展、学会の活性に大きく貢献されるものであり、深い感銘を受けました。

物事の始まりは、ほんの些細なことから思いがけなく発展して行くことがしばしばあります。

この学会のそも始まりは、昭和63年1月30日、宇部の山口厚生年金休暇センターにおいて友永進先生等による国際シンポジウム” Evolution and Differentiation of the Immune System”であると思っています。今、その時の記念写真を拝見しますと Dr. E.L. Cooper を中心に福本、友永、栗谷、小林(邦)、

村松繁の諸先生がたが最前列に、そして、他の列に中西、乙竹、菊池、中村の諸先生がたのお顔も見られます。その当時、私は中村、菊池の両先生以外の先生方はどなたも存じ上げませんでした。他に多数の免疫学の大家が出席され、中国、韓国からの研究者も多数参加されていました。

そして、それからおよそ1ト月後、どう言ういきさつからか私は Dr.Cooper が2月23日羽田経由成田発で中国に向かわれることを知り、友永先生宛てに Dr.Cooper を東京で昼食会にお招きしたい旨の手紙を送りました。私一人では、まことに心細いので、当時まだ青年研究者であった中村先生と医動物学教室の小林睦生先生を強引にお誘いして、東京プリンスホテルに四人分の昼食を予約いたしました。ところがどう言うわけか、次々と参加申し込みが古田の所にまいこみ、当日は菊池、和合、松崎（島根大学）、松里（中央水研）の先生方も加わり、大昼食会となりました。Dr.Cooper の DCI への情熱と日本の比較免疫学者の会を作ることの意義を口角泡を飛ばして話され、それに輪をかけた情熱が松里先生から語られました。昼食会の終わりには、ワインの力も加わり、皆国際学会開催への夢をそれぞれ語り始め、あれよあれよと言う間にサテライトではなく独立した“比較免疫学会”を決意したのでした。すぐに発作が起きる古田は、それに向かって猪突猛進、北大、山口大に電話。その方向に走りはじめました。昭和63年10月、日本動物学会は札幌医大で開催され、そこでのサテライトシンポジウムの会場で、独立の学会を設立することに全会一致で決定されました。北大の片桐先生、山口大の友永先生、それに古田が議長団をつとめました。アツという間に事務局が獨協医大にまわされ、今しばらくは”研究会”として進めて行くことになりました。

初代会長は、京大の村松繁先生にと言う強い要望があり“古田先生、お願いして下さい”と有無を言わさぬご命令で、古田はまだお目にかかったこともない村松先生に、失礼をも省みず電話で“三拝九拝”して会長を引き受けて頂きました。まさに村松先生にとりましては、「晴天の霹靂」であった事と存じます。

北大から送られてきました1万5千円（大赤字）で、この学会の基礎は始まったのであります。

あの時の、あの情熱はどこから来たのでしょうか？「皆若かった！」だけではなかったと今でも不思議に思います。

そして、平成18年。第18回目を迎えました。そして、私はといえば、まだあの情熱が冷めやらないのでしょうか、それとも昔の「皆若かった！」頃を偲びたいがためでしょうか、とうとう「古田賞」を作ってしまった。他の学会のメンバーが羨ましがれる程情熱的な学会であったあの頃のように、今もう一度比較免疫学に対する情熱を燃やして欲しいと心の底から願っているのです。そして、世界の「日本比較免疫学会」になってもらいたい！三つ四つのノーベ

ル賞をとって欲しいと願っているのであります（ホントです）。

わたつみの 豊旗雲に 入日見し

こよひの月夜 さやに照りこそ！！

(天智)

付記 平成18年8月25日

午前のシンポジウムが終わり、心尽くしのパンケーキとお茶の並ぶロビーのテーブルで、今年82歳になられた丹羽先生から素敵な貝殻と四首の俳句を頂きました。

古田が独り占めするのはあまりにも勿体ないと思い、その四首をここに記させて頂きました。

2006年8月25日

被爆者の骨も混じらむ貝拾ひ
朝焼けやかの修羅の日の幻か
舷灯のいくつ過ぎしか明け易し
還暦のおうなも知らず原子光

真琴

